〈論　文〉

意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察

荻　原　稚佳子

キーワード：意見述べ，論理展開，冒頭型，末尾型，会話分析

1. はじめに

異文化間コミュニケーションで起きる誤解や理解の欠如の原因として，論理展開の違いが挙げられている。Scollon & Scollon（1995）によると，日本人をはじめとするアジア人が行うコミュニケーションでの論理展開は，帰納的（topic-delayed）であるのに対して，西洋人は演繹的（topic-first）であるという。そのため，演繹的な論理構成をする文化を背景とする人々にとっては，日本人のコミュニケーションは，何がポイントであるかが分からず，論理的でないと批判される。また，Kubota（1992）では，日本人学生は帰納的な文章構成をとっているにもかかわらず，読んで内容を理解する際には，帰納的な論理構成よりも，演繹的な論理構成のほうがわかりやすいとしている。

しかし，コミュニケーションにおける論理展開についての研究は，文章についての研究がほとんどであり，日本人の会話における論理展開については，Scollon & Scollon（1995）にアジア人の特徴としての記述がある程度である。そこで，文章における論理展開についての研究を概観した上で，日本人の会話において，意見を述べる場合に論理展開がどの程度帰納的，または，演繹的なのかを分析し，どのような属性が論理思考に影響を与えているのかを探ってみたい。

2. 論理展開についての先行研究

2.1　Kaplan の論理展開モデル

論理展開については，コミュニケーション論の対照修辞学（Contrastive Rhetoric）の一研究分野であるが，それほど長い研究が成されてきたものではない。その発端となったのが，Kaplan（1966）の世界各言語の論理構造のパターン（図 1）である。このモデルは，英語中心主義的なことや，あまりに単純化されたモデルであることで批判も多く浴びたが，語順や思考の順序は，各言語に特有で特徴的なものであるという考え方を広めた。

ただ，Kaplan（1966）の論理構造パターンの中に，「オリエンタル」の論理構造パターンがある

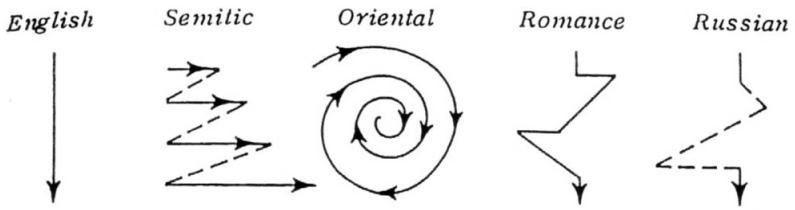

図1　世界各言語の論理展開のパターン

が，そのパターンに含まれているのは韓国語と中国語であり，日本語は含まれていない。その上，韓国と中国は，儒教思想に導かれた東洋的な思想を持つという点や文化面では共通のグループと言えるが，言語面では，韓国語が中国語の影響を受けているとはいえ，中国語はシナ・チベット語族，韓国語はアルタイ語系で系統も異なり，また，語順も異なる。これらの理由から，「オリエンタル」パターンが論理思考のある象徴的なものを表しているとしても，日本人コミュニケーションにそのまま当てはまるものかどうかには疑問が残る。

2.2　Hinds による日本語に関する論理展開研究

次に，日本語に関する談話の論理展開についての研究として，一連の Hinds による研究がある。Hinds（1983）では，朝日新聞の「天声人語」の論理展開を分析し，「起承転結」の文章構成をしており，日本語ではこの構成が良いと考えられていると指摘している。また，「起承転結」の「転」に当たる部分は，他の部分と関連はあるが直接的な関係がないため，Hinds（1984）では，英語母語話者は，日本語話者より，「統一性」や「焦点」，「一貫性」の点で論理性が低いと評価した。

しかし，上記 2 つの論文については，分析に使われたのが「天声人語」であり，その結果を日本語の論理展開であると一般化した点に問題が残る。「天声人語」は，日本人に長く親しまれた新聞コラムだが，多少の意見が書かれることはあっても，文章の分類としては，基本的に随筆の分類に入る。また，確かに学校教育で「起承転結」の構成で作文指導が行われるが，作文の文章分類は随筆や感想文であり，意見や考えを論理的に述べる文章とは，別のものとして考えるべきだと考える。

2.3　日本語コミュニケーションの特徴を考慮した研究

Hinds の研究は，その後違った視点での論理展開研究へと移っている。Hinds（1987）では，やはり「天声人語」を使って，書き手と読み手の責任の重さという観点から「起承転結」型の論理展開を分析しており，西洋と比較して，日本語の文章では，より受け手（読み手）に文章の一貫性を読みとる責任があると結論づけている。

Hinds（1990）は，日本語・中国語・タイ語・韓国語について，帰納法に近い論理展開が見られると指摘し，「準帰納法」（quasi-inductive）と呼んでいる。この 4 カ国語では，「演繹法」でも「帰納法」でもない論理展開をしており，論旨が文章の中に埋め込まれた形で表現され，文章を書く目的は冒頭ではなく遅れて出てくる。また，話題は明言されず，暗に示されるとしている。さら

に，Hinds（1987）の結論に関連して，日本語は読み手に責任がある言語なので，書き手は全てを明らかに述べず，読み手自身の結論を出すという課題を与え，書き手は読み手が熟考できるような刺激を与える責任を負っているのだと結んでいる。

また，本名（1989）では，5つの文からなる談話の並び替えをさせることによって，論理展開の比較をしている。それによると，アメリカ人の場合は，最も好まれる構造がはっきりしており，問題提起から発展，結論へと直線的な文章構造だが，日本人は，文章構造についての一定の規範が確立しておらず，すぐ核心へ迫るのではなく，まず周辺を探るという遠回しな言い方の傾向があるとしている。これは，日本人の「察し」の文化を反映したコミュニケーションであると指摘している。

また，メイナード（2004）では，Yomiuri On-Line の「人生案内 Q & A」に現れた人生相談への返答意見文の構成を分析している。ここでは，40 本の質問中 39 本に返答意見が見られ，返答が出てくる段落位置は 71.07%，つまり，段落数を約 7 割進んだところで意見が出ており，意見述べの談話構成が尾括型であることを示している。そして，意見文談話のはじめにためらいなどの前置きが多く現れ，相手との相互関係を考慮した上で，意見を述べていると結論付けている。

これらの研究では，日本語コミュニケーションにおける受け手の役割の重要性の観点から，英語文化圏でのコミュニケーションとの基本的な考え方の違いを示しており，こうした視点は他言語との比較をする上で重要な認識であると評価できる。

2.4　使用言語や状況を考慮した研究

論理展開を，言語の違いだけで比較するのではなく，使用言語や状況の違いにも焦点を当てた研究として，Kobayashi（1984）がある。Kobayashi は，研究対象者を 4 つに分け，叙述や論理的な解説を含む作文を課し，その構成を一般論（general statement）と具体的な事項（specific）の提示順によって分析した。対象者グループは，①英語を母語とするアメリカの大学生，②アメリカの advanced レベルの ESL で勉強する日本人学生，③日本で英語を専攻している日本人大学生，④日本で英語以外を専攻している日本人大学生，である。①②③の学生には英語で，④の学生には日本語で作文を書かせた。その結果，①の学生は，一般論を先に述べる general-to-specific パターンであるのに対し，④の学生は一般論を最後に述べる specific-to-general パターンであった。そして，②③は，それらの間に位置するが，②はより①に近く，③はより④に近いパターンを示したという。

つまり，論理展開はそれぞれの言語特有のものとは断言できず，書き手の母語，コミュニケーションを行う時に使用する言語，使用する場・状況によっても違いがでてくることを示している。

また，Scollon & Scollon（1995）は，西洋人でも常に演繹的な論理展開を使っているわけではなく，その状況やコミュニケーションでの役割・人間関係により，お互いの尊重や敬意を表したり，力関係が働くときは帰納的な論理展開を行って，使い分けしていることを示している。これらの研究からも，Kaplan（1966）の論理展開パターンが，母語の言語形態に特徴的であるとした点に限界があり，あくまでも一つの指標に過ぎないと言える。

日本人の文章構成についての研究を概観したが，論理展開を分析するにあたり，対象とする文章・会話の機能や目的・各言語のコミュニケーション特性・状況や人間関係等のコミュニケーション要素を考慮する必要があると考えられる。

3. 研究方法

次に，会話での意見表明の談話における論理展開がどのような構成で行われ，どんな属性（性別・年齢・職業などの違い）により，使用する論理展開が変化するのかを，日本語コーパスを使って分析する。

会話分析には，ACTFL-OPI[(1)] 形式による日本人同士のインタビューを文字化した日本語コーパス[(2)] を利用する。これは，1 対 1 のインタビュー形式で，簡単な挨拶から始まり，趣味や日常生活，仕事，社会問題まで様々な話題を自然な会話の中で取り上げている。このコーパスを選んだのは，相互性があり，対人コミュニケーションが行われる様々な場面に対応したものであり，非常に自然なインタビューの会話であること。また，それぞれの会話の自然な流れの中で，社会的な問題について意見を求められており，日常の日本人のコミュニケーションにおける意見の展開が見られると判断したからである。

インタビュー対象者は，表 1 の通り，日本人母語話者 48 名（男 20 名・女 28 名）で，学生や主婦，社会人などである。インタビュアーは，女性の大学教師 2 名が担当している。

分析に使用したのは，各インタビューで意見を求められている部分で，話題は「オリンピックにおけるドーピングについて」「外国人と比較した日本人の働きぶりについて」「給食の是非について」「早期英語教育制度の導入について」などである。これらの抜き出した部分がいくつの文で成り立っているかを調べる。取り出す部分は，話者のまとまった意見が出ている部分としたことから，途中でインタビュアーが割り込んで語彙の確認などをした場合は，2 つ以上のターンにまたがって表れることもあった。ここでは，文を「ある文型・文法事項を含んだ完結したまとまり」と定義し，話し言葉である特性を考慮し，ポーズがあり文末が省略されていると思われる場合は，それを補うことで主観的に判断した。「そうですね」などの表現が意見部分の冒頭に多く見られたが，メイナード（2004）でも指摘されていたように，インタビュアーの意見求めを受入れて考えていることを示すフィラーと判断し，意見の論理展開には影響がないと判断し，意見部分の数には入れなかった。

表 1　インタビュー対象者の概要

対象者	男　性	女　性	合　計
社会人	10	10	20
学　生	10	11	21
主　婦	0	7	7
合　計	20	28	48

次に，取り上げた会話部分の中で話者の中心となる意見を「中心文」と呼ぶことにし，何番目の文の中に中心文が表れるかを特定した。そして，中心文が，意見を述べているまとまりの中で，冒頭にあるもの（冒頭型）と末尾にあるもの（末尾型）の割合を比較した。また同時に，メイナード（1997）の新聞コラムのコメント文の分布調査方法にならい，中心文が談話全体の中の何％の場所で出てくるかを調べた。つまり，意見を述べている部分が5文で構成されていた場合，4文目に中心文があれば，全体の80％の位置で中心となる意見を述べていると判断できるわけである。

例として，テニスで英才教育が行われ，勝つことが重視されてきていることについて述べている会話の場合を見てみる。（以下，14などの番号はインタビュー対象者の番号を示し，R：インタビュアー，かっこ内は相づちを表す。文ごとに①～⑪の番号を振る。×××は聞き取り不明部分，／はポーズ，…は言いよどみを表す。下線の文が中心文と判断したもの）

14：①それもーあのー難しいですね。（R：うん）②結局あのわたくしも，あの学生の時は，あのそれこそ体育会という，所で，やっておりましたので，あのもうそれこそ勝つことが目標で（R：うん）やっていて，その時のー，仲間ー，もずっと引き続きテニスー，を一所懸命やってる，仲間もいるんですね。③でその人達ーがやるテニスっていうのはやっぱり，あのー今の，あのおばさんになっても，（R：うんうん）あのー，勝つことが目標で，（R：うーん）あのー，ですから，そこには，あの，やっぱり，大変な世界があるという。（R：うーん）④でもまあ，あの楽しんで，私みたいに楽しんでやってる人もいるし，それはあのー，そのー人その人の，あのー，気持ちー，で，あのいいと思います。

①でまず感想を述べ，②で学生の時や，当時の友人などの背景を述べ，③で現実の事情を説明した後，④で自分の考えを表明しているので，④を中心文と判断し末尾型とした。

薬害がなかなかなくならないことについて意見を求められた場合，

30：はい，はい。①でも，厚生省，／まあ，ゆ，ってはなんですけれどもやはり，お役人てこんなものなのかなと。（R：あ，はい）はい。②自分の，兄が，厚生省に，以前，おりましたので，その時の話なん，て，かんーぜんに，役人になってしまって始めは大学の教授だっ（R：そう）そこから，向こうに入，って，こんな人間　は変わるもの（R：あっ，×××）かなと思うほど，変わりましたからね。

質問を受けた直後の「はい，はい」は意見を求められたことの受入を表すフィラーと考え，意見部分としての文に入れない。①の文で，「こんなものだ」と言う意見を述べた後，②で自分の兄の具体例を挙げて，その意見を支える理由としている。中心文は，①で，冒頭型と判断した。

こうして得られたデータから，論理展開の傾向と各属性（性別・職業・年齢グループ・海外在住経験）による影響がどのように表れるかを分析する。

4. 結　　果

分析の結果，意見を述べている部分は 2〜11 文で構成され，平均 4.67 文であった。中心文は，平均 56%進んだところに現れた。また，話題の違いによる有意な結果の違いは見られなかった。

4.1　冒頭型と末尾型

調査の結果，48 名中冒頭に中心文を述べたのは 19 名で，全体の 39.6%，末尾に中心文を述べたのは 23 名で，全体の 47.9%を占め，その他が 6 名で 12.5%であった（図 2)。この結果から見ると，約半数の人が末尾に中心文を出す末尾型である。χ^2 検定の 5%レベルで，冒頭型と末尾型の差は有意な差であると認められ，明らかに二つの論理展開を取るグループに分かれた。また，冒頭型・末尾型以外の場合でも，6 名中 4 名が終わりから 2 文目に中心文を述べており，全体的に，後半に中心文を述べる傾向が強いとわかった。

4.2　属性別結果

対象者の属性別結果を見てみると（図 3〜7)，次のようなことがわかった。

4.2.1　性別結果

談話の論理展開に影響を与える属性として，まず，性の違いを考えた。男女別の結果を見る（図 3）と，男性 20 人中冒頭型は 8 人，末尾型は 10 人，それ以外が 2 名で，半数が末尾型であった。全体平均では意見談話の 56%の位置で中心意見が述べられている。また，女性 28 名中冒頭型は 11 人，末尾型は 13 人のほぼ同数で，それ以外が 4 名いた。平均でも，男性とほぼ同じく 56%の位置で中心文が表れていることになる。この結果から，性別による差はほとんどなく，どちらもやや末尾型が多かった。χ^2 検定の 5%レベルでは，男女で有意な差は認められなかった。

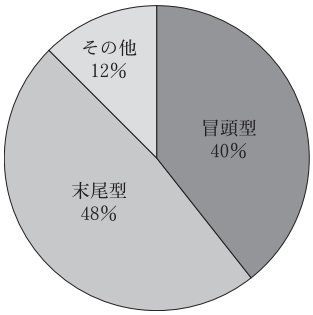

図 2　冒頭型と末尾型

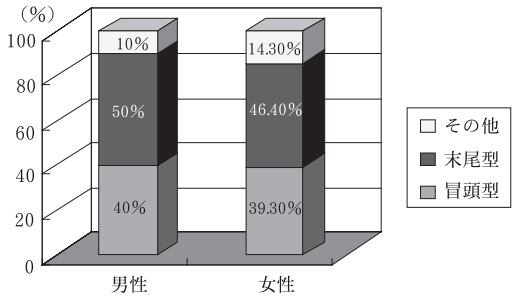

図 3　男女別結果

4.2.2　職業別結果

対象者を，学生，仕事を持っている社会人，主婦の 3 つのグループに分けて集計した結果，学生 21 人中冒頭型が 5 人，末尾型が 12 人で，57.1%の人が末尾型であった。社会人は，20 人中 10 人が冒頭型，8 人が末尾型，その他が 2 名で，差が小さかった。また，主婦は，7 人中 4 人が冒頭型，3 人が末尾型で，冒頭型の方が一人多かった（図 4）。

中心文の出現位置については，平均すると，学生が 71%，社会人が 45%，主婦が 43%進んだ所で意見を述べており，学生の末尾型の多さが目立った。

男女別に見てみると，女性社会人と女子学生の冒頭型と末尾型の割合がほとんど同じでやや末尾型が多いが，主婦は冒頭型がやや多い。一方，男性社会人は冒頭型が 70%であるのに対して，男子学生は逆に末尾型が 70%で，全く違った結果が見られ，χ^2 検定で 5%有意であった（図 5）。

4.2.3　学生グループ vs 社会人グループ

今回の調査では，インタビュー対象者の年齢がコーパス上で発表されていなかったため，年齢に代わる一つの要因として，学生と大学卒業時の年齢以上というグループ分けをすることによって，大まかな年齢的な違いのグループとした。社会人が，大学を卒業している，または，30 代以上と

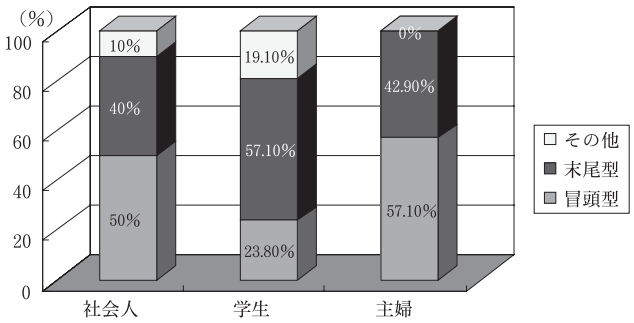

図 4　職業別結果

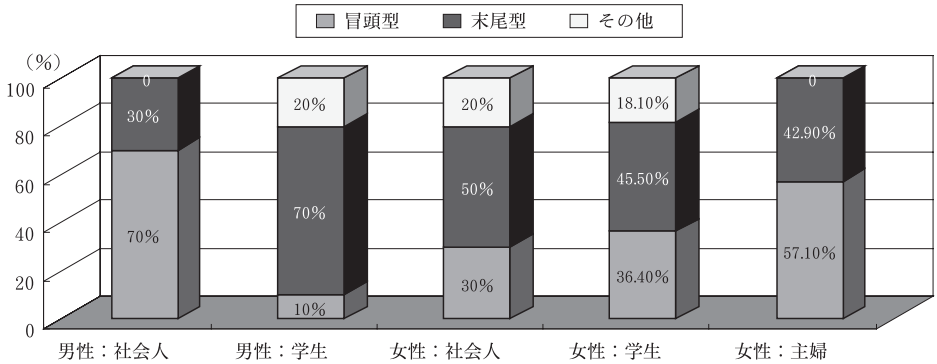

図 5　男女・職業別結果

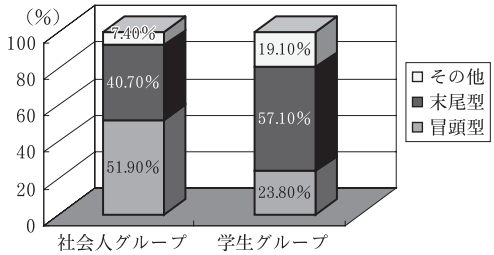

図 6　学生グループ・社会人グループの結果

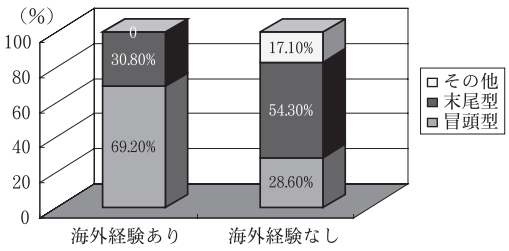

図 7　海外経験者・未経験者の結果

いうことは，インタビュー内容から分かったが，学生の中には大学院生も 2 人含まれており，20 代である確証はないことをお断りしておく。学生グループ 21 名は，前述したとおり，冒頭型 5 人，末尾型 12 人，その他 4 人であった。それに対し，社会人グループは，27 人中，冒頭型 14 人，末尾型 11 人，その他 2 人で，やや冒頭型が多かった。中心文の位置は，学生平均は 71%，社会人平均は 45%の位置であった（図 6）。

4.2.4　海外在住経験

最後に，対象者の論理思考に影響があると思われる属性として，海外在住経験の有無により対象者をグループ分けした。日本語講師など日常的に外国人と接している人や，英語専攻の学生や留学生が身の回りに多くいる環境の学生もいたが，こうした状況からだけでは，どれだけ他文化との接触を持ったかは判断できない。その上，日本で暮らしている限り，日本文化の中にいることは否定できないので，論理思考の基本は日本にあると判断した。それに対して，他文化の中で生活した経験を持っていれば，当然その文化に従ったコミュニケーションに触れていると判断し，在住経験者に限った。インタビュー内容から，明らかに海外で暮らした経験がある人が，13 名おり，残りの 35 名との比較を行った。

海外在住経験者 13 名中 9 名が冒頭型，末尾型は 4 人だった。経験のない人は，35 名中 10 名が冒頭型，19 名が末尾型，その他が 6 名であった。つまり，経験者は 69.2%が冒頭型で，経験のない人は 54.3%が末尾型という対照的な結果が出た（図 7）。その他の 4 名も後ろから 2 番目の文が中心文だったことを考慮すると，経験のないグループでの末尾型傾向の割合はさらに増える。中心文の提出位置は，経験のあるグループが 31%，経験のないグループが 82%の位置で出現しており，χ^2 検定で 5%有意であり，属性別結果の中で最も大きな相違が認められた。

5. 考　　察

以上の結果から，三つの知見が得られた。まず，会話における論理展開は，文章における論理展開ほど明らかに帰納的であるとは断言できないことがわかった。そして，個人差があり，明らかに

演繹型の論理展開をしている人も 39.6%いることから，どちらかに一般化することはできないと言える。

文章における論理展開との結果に相違があった理由として，文章と会話の違いが考えられる。書き言葉は，書く前，書いている間，書いた後と，何度も内容や構成を練り直す時間がある。そのため，書きながら結論を考えるという人もいると思われる。しかし，会話では，相手に聞かれれば，すぐ返答しなければならないし，一談話中に何度も意見を変えることもできない。その上，一瞬で消えてしまう音声であるため，より分かりやすさが求められることから，質問に対して直接的な答えをまずぶつけてから理由を述べるという冒頭型の論理展開が多くなったのではないだろうか。

次に，ある論理展開の型を決定づけていると考えられる属性別に結果を分析したところ，海外在住経験が最も大きな要因であることが分かった。海外在住経験者は，アメリカ・ドイツ・英国で留学または仕事の関係で，少なくとも 3 年〜10 年以上在住しており，当然その文化圏で使われている言語を使って，論理的に意見を表明したり，相手を説得するというコミュニケーション活動を行ってきたことは確かである。各言語のコミュニケーション特性を考慮すると，アメリカ・ドイツは，ホール（1979）が言うところの典型的低コンテキスト文化であり，英国も高コンテキストと低コンテキストの混在した文化である。Tirkkonen-Condit & Lieflander-Koistinen（1989）においても，ドイツ語と英語では冒頭部分に論説の要旨が出てくる演繹法的な構成が好まれるとしている。そこでコミュニケーションを成功させるには，相手に分かりやすい直線的論理展開で詳しく説明する必要が生じる。状況によって，よく使用される論理展開の型が変わってくるという Kobayashi（1984）の結果のように，各言語文化圏で有効な論理展開を海外在住中に身につけたと推察でき，その論理展開の型が意見を述べるときの自分の思考スタイルとして定着し，日本で日本語を使用する場合にも使っていると判断できる。この点では，先天的属性よりも，後天的属性が強く働いていると解釈することができる。

第 3 に，性別ではやや男性に，職業の違いでは学生に末尾型が多く，それに対して，男性社会人と主婦に冒頭型が多かった。特に，男性学生と男性社会人では，中心文の位置が 82%と 30%という大きな違いがあり，χ^2 検定で 5%有意であった。これは，社会に出て職場などで意見を述べる場合には，相手に理解されやすいような話し方の要求度が高いため，より理解しやすい論理展開である冒頭型で意見を述べることが多い可能性が考えられる。

ただ，社会人といっても，女性の場合は，社会人と学生の間に有意な差が見られず，どちらも全体平均に近い数値であることから，社会で意見を述べる機会の頻度の差など，結論を出すにはより詳しい調査が必要である。

一方，学生の末尾型の多さについては，Scollon & Scollon（1995）が，様々な状況・対人関係により，使われるストラテジーが異なると述べており，インタビュアーと対象者の関係を考慮する必要がある。まず，インタビュアーと対象者が初対面であることから，お互いの距離を保ち尊重しあう敬意のストラテジー（Deference politeness system）が働いたため，性別では同性でない男性により強く，年齢的にはインタビュアーより年少の学生グループに影響を与え，結論を遅く持ち

出す末尾型の論理展開が多く使用されたと考えられる。

特に，インタビュアーが大学教師であったことに注目して学生との関係を考えると，敬意のストラテジーより力関係によるストラテジー（Hierarchical politeness system）が働いたとも考えられる。そして，上下関係にあまり関係のない環境にあって，インタビュアーと年齢的にも近く同性である主婦には，より親しさを求める連帯ストラテジー（Solidarity politeness system）が強く影響を与え，社会人が職場で要求される状況とは異なる理由から，直接的な構成で演繹的な論理展開がやや多く使用されたという可能性も考えられる。

これらの点については，インタビュアーの性別を変えて調査することで，今後確認していく必要がある。

今回の分析では，48 の限られた会話の分析結果であるため，一般論として結論づけることはできないが，会話における日本人の論理展開は必ずしも帰納的とは言えず，様々な影響を受けて属性別の傾向が得られることが分かった。また，海外在住経験が論理展開に影響を与える大きな属性であったことから考えると，意見を述べる会話教育によっても，論理展開の点で様々な文化をもつ人々との意見交換，意見の理解がもっと円滑にできるようにすることができると言えよう。

今後は，分析対象を増やし，対象者の属性を考慮することによって，日本人の多様な実態をより詳しく把握することができれば，異文化間コミュニケーションで起こる問題を解決したり，事前に避けたりするための知恵を得ることができ，また，そのためのストラテジーを，様々な属性によって分けられた対象者別に構築していくことができると考えている。

〈注〉

（1） ACTFL-OPI：全米外国語教育協会の方式によるインタビュー形式の口頭能力試験。

（2） 日本語コーパス：上村隆一編（1998）「文部省科学研究費補助金重点領域研究：日本語会話データベースの構築と談話分析」『じんもんこん DATABASE』，神奈川：重点領域「人文科学とコンピュータ」総括班　総合研究大学院大学　Vol. 1。

参考文献

Kaplan, R. B. (1966) “Cultural Thought Patterns in Intercultural Education,” *Language Learning* 16, pp. 1–20

Kobayashi, Hiroe (1984) “ Rhetorical Patterns in English and Japanese,” *TESOL Quarterly* 18, No. 4, pp. 737–738

Kubota, Ryuko (1992) “Contrastive Rhetoric of Japanese and English: A Critical Approach,” Ph. D. dissertation, Department of Education, University of Toronto

Hinds, J. (1983) “Contrastive Rhetoric: Japanese and English,” *TEXT*. 3, No. 2, pp. 183–195

――― (1984) “Retention of Information Using a Japanese Style of Presentation,” *Studies in Linguistics* 8, pp. 45–69

――― (1987) “Reader Versus Writer Responsibility: A New Typology,” Writing Across Languages: Analysis of L2 Text, edited by U. Connor and R. B. Kaplan, pp. 141–152, MA, Addison-Wesley

――― (1990) “Inductive, Deductive, Quasi-Inductive: Expository Writing in Japanese, Korean, Chinese, and Thai,” Coherence in Writing: Research and Pedagogical Perspectives, edited by U.

Connor and A. M. Johns, pp. 87–110, Alexandria, VA: TESOL
Tirkkonen-Condit & Lieflander-Koistinen (1989) "Argumentation in Finnish versus English and Germen editorials," Discourse Interpretation Argumentation, ed. by M. Kusch and H. Schroder, 173–181. Hamburg: Buske.
Scollon, R. & S. W. Scollon (1995) *Intercultural Communication.* Oxford: Blackwell.
ホール，E. T.（1979）『文化を越えて』（TBS ブリタニカ）
本名信行（1989）「日本語の文体と英語の文体」『講座日本語と日本語教育』5, 明治書院, pp. 363–385
メイナード，泉子（1993）『会話分析』（くろしお出版）
————（1997）「新聞コラムのレトリック」『談話分析の可能性 ── 理論・方法・日本語の表現性 ──』（くろしお出版）, pp. 123–142
————（2004）『談話言語学 ── 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究 ──』（くろしお出版）